

# 外国人園児受け入れに対する保育士の意識の規定要因

野崎 剛毅（國學院大學北海道短期大学部）

## 1. 問題の所在

1990年の入国管理法改正以降、我が国ではニューカマーと呼ばれる外国人労働者、特に日系ブラジル人が急増した。デカセギ目的で来日した彼らは徐々に定住化し、その子どもたちを巡る教育・保育上の問題が生じてきている。その中でも、保育を巡る問題はその後の人間形成の重要な基盤となる時期であるがゆえに重要であるといえる。

しかし、その重要性にもかかわらず、就学前段階を扱った研究はほとんどなく、あったとしても、実際に外国人園児と向き合った際にどのように接すればよいのかという検討にとどまっている。

そこで、本報告では日系ブラジル人の集住地として有名な3市町で行った保育所調査をもとに、外国人園児の受け入れを保育士たちがどのようにとらえているのか、また、受け入れへの評価がどのような要素に規定されているのかを見ていくこととしたい。これらの検討により、外国人園児の保育が抱える社会的な課題をよりマクロにとらえることが期待できる。

## 2. 調査の概要

調査は群馬県大泉町、愛知県豊橋市、静岡県浜松市でおこなった。調査は保育士調査、日本人保護者調査、外国人保護者調査からなる。各調査の概要については表1の、調査対象園の概要については表2の通りである。豊橋調査と浜松調査では、各市役所より調査対象園を選定してもらっている。

表1 調査の概要

	調査園数	時期
大泉	公立3園私立3園計6園	2005年12月
豊橋	公立0園私立3園計3園	2006年9月
浜松	公立2園私立2園計4園	2007年9月

表2 調査対象園の概要

	園	設置	園児数	外国人園児率	保育士調査回収率
大泉	A	公	141	6.4%	90.0%
	B	公	158	5.1%	90.9%
	C	公	107	19.6%	77.8%
	D	私	98	21.4%	86.7%
	E	私	100	23.0%	93.3%
	F	私	106	3.8%	68.8%
豊橋	G	私	221	25.3%	94.3%
	H	私	231	18.2%	29.0%
	I	私	224	11.6%	100.0%
浜松	J	公	133	17.3%	100.0%
	K	公	84	15.5%	100.0%
	L	私	49	24.5%	83.3%
	M	私	108	5.6%	100.0%

## 3. 分析の枠組み

品川・野崎・小内（2006）は、大泉町のE園を対象として行った01年調査と05年調査を比較した。その結果、外国人園児を受け入れることを肯定する保育士の割合が大幅に減少していた。一方、E園と状況の似ているD園では、ほとんどの保育士が外国人園児の受け入れを肯定していた。品川らはこの2園の差を、①保育方針、②園を取り巻く環境、③経験の蓄積、の3点から説明を試みた。

本報告では、この視点をより拡大し、豊橋市、浜松市の調査結果も用いて検証することとする。検証する仮説は以下の3点である。

- ①：園児の日本人化を志向する保育実践は、外国人園児受け入れへの姿勢を消極的にする。
- ②：園をサポートする体制が弱い園は、外国人園児受け入れへの姿勢を消極的にする。
- ③：若い保育士が多くベテランの少ない園は外国人園児受け入れへの姿勢を消極的にする。

## 4. 各園の傾向

④外国人園児の受け入れについて

まず全体の従属変数となる「保育所が外国人園児を受け入れることについて」保育士が

どのように考えているのかを確認しておく。外国人園児受入に肯定的な保育士は全体の80.9%に及ぶ。大前提として、ほとんどの保育士は外国人園児受入に肯定的といえる。肯定的な者が最も少ないのはE園の21.4%、次に少ないのはM園の62.5%である。

### ① 保育方針

ここでは4つの質問への回答傾向をもとに各園を母国文化尊重型と日本人化志向型とに分類した。この類型で保育士の外国人園児受入の意識をみてみると、母国文化尊重型の園では89.4%が受入に肯定的であったのに対し、日本人化志向型の園では肯定的な者は61.9%に過ぎなかった。

### ② 園を取り巻く環境

ここでは、お便りなどの翻訳を誰がするか、そして、保護者の日本語能力がいかばかりかという2点で、園を支える体制を検証した。その結果、いずれも保育士の意識へ与える影響はあまり大きくなかった。ただし、公立か私立かという、行政のバックアップの有無は多少なりとも影響を与えている。

### ③ 経験の蓄積

保育所全体の経験の蓄積を示す指標として、保育士の平均年齢、平均経験年数、キャリア5年以内の割合、キャリア20年以上の割合の4点を検証した。その結果、「若さ」が否定的な意識を生み出すというよりは、ベテラン保育士の存在が肯定的な態度を支えていることがわかった。

## 5. 保育士の意識の規定要因

ここまで、保育所を対象として分析をしてきた。では保育士個々の意識は何によって規定されているのであろうか。この点を明らかにするため、外国人園児受入の是非を従属変数とした重回帰分析をおこなった。

独立変数には勤務する園のタイプや保育士自身の属性、保育士自身の保育に対する考え方などを設定した。その上でステップワイズ法による変数の選定をおこなうと、表3の重回帰式が得られた。

表3 重回帰式

独立変数	非標準化係数	標準化係数	有意確率
(定数)	1.893	—	.000
国際的な視野が広がる	.242	.336	.000
園：公立ダミー	.251	.183	.007
園：キャリア20年以上	.181	.205	.003
保育所では日本語を使うべき	-.089	-.134	.039
調整済みR2値			.250
重回帰式の分散分析の有意確率			p<.001

従属変数：外国人園児が入園することについて

この式から2つのことがわかる。まず、働いている保育所のタイプが、保育士個人の考え方に大きな影響を及ぼしていることである。これは、外国人園児に対する考え方が個人の素養だけに帰するものではないということを示している。2つめに、外国人園児の人数や割合などの変数が排除されていることである。外国人園児との接触頻度が意識を規定するわけではない。

## 6. 結論

新倉涼子は、外国人園児の受け入れによって異文化と接触した保育士がその困難を乗り越える力を「異文化間トレランス」と呼んだ(新倉 2002)。このような考え方は、外国人園児への対応を個人の資質に還元するものといえる。

しかし、本報告では以下の点が明らかになった。1点目に、保育所の保育方針が保育士の意識に大きな影響を与えていること。2点目に、ベテラン保育士の存在が、外国人園児の受け入れに対する意識を左右すること。3点目に、保育士個人の意識は周囲の環境に影響を受けていること。これらは、新倉のいう「異文化間トレランス」の習得が個人の資質だけによるものではないことを示している。

## 参考文献

- 新倉涼子、2002、「外国籍の児童や生徒の教育に関わる日本人の保育士や教師の異文化間トレランス」『異文化間教育』16号  
野崎剛毅、2009、「日系ブラジル人保育の課題」『國學院短期大学紀要』第26巻  
品川ひろみ・野崎剛毅・小内透、2006、「日系ブラジル人保育の現状と課題」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』58号